



TITLE:

# 新國民主義と國民共同體

AUTHOR(S):

石川, 興二

---

CITATION:

石川, 興二. 新國民主義と國民共同體. 經濟論叢 1937, 44(1): 144-161

ISSUE DATE:

1937-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130881>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四十四卷 第一號

昭和二十一年一月一日發行

## 新年特別號

地方營業稅の課稅標準……………	法學博士 神戸正雄
固定資本論の一節……………	文學博士 高田保馬
土地所有の集中と分散……………	經濟學博士 八木芳之助
大都市時代の出現と <sup>その可</sup> 能原因の考察……………	經濟學士 中川與之助
經營協議會制度の成立……………	經濟學士 大塚一朗
北支日系通貨に就て……………	經濟學士 松岡孝兒
アメリカ經濟の發達と通貨論爭……………	經濟學士 堀江保藏
統計・統計調査・統計教育……………	經濟學博士 蜷川虎三
貿易と生産消費との關係……………	經濟學博士 谷口吉彦
新國民主義と國民共同體……………	經濟學博士 石川興二
金融の動きと銀行勘定の増減……………	經濟學博士 小島昌太郎
新着外國經濟雜誌主要論題……………	

## 新國民主義と國民共同體

石 川 興 二

## 一 國家主義の模倣者としての現代日本

今日の動亂期に於ては、明確なる實踐的自覺に立却してのみよくこれに處し得ることは、個人たると國民たると異ならない。現に世界史的舞臺に於て有力に行動しつゝある國民は、自己の國民性と國情とに即せる實踐的立場に自覺的に立却して居るのである。今日の資本主義的秩序を國內的にまた世界的に確立するための導指的立場に立つた英國民は、依然資本主義立場に立つて資本主義的秩序を維持せんと努力して居る。これを變革せんとする者にあつては、その壓政的な國民史に即してこれを社會主義的に變革し更にこれを世界に及ぼさんとして居るロシアに對し、獨逸はこれを國家主義的に變革せんとし更にこれを世界に及ぼさんとしつゝある。かくて今やスペイン革命を契機として世界は右翼の國家主義的陣營と左翼の社會主義的陣營の對立を激化しつゝある。かくこれ等の諸國民が有力に行動しつゝあるは自己の國民性と國情とに立却せるが故である。然らば現代日本は果して自己の國民性と國情とに即する實踐的立場を自覺して行動しつゝあるであらうか。我々は遺憾ながら、今日の爲政者についてはこのことを否定せざるを得ない。彼等の對支政策ことに最近祕密裡に締結せし日獨、日伊の防共

聯盟なるものは、このことを最も顯著に示めして居る。彼等はロシアの共產主義的攪亂を防止せんが爲めにこの聯盟を結んだのであるが、ロシアの社會主義立場が我國民性並に國情に一致せざると同様に獨逸等の國家主義も我國民性並に國情に全く合致しないのである。彼等はこのことを明確に意識して居ない。それ故に社會主義を不可となすことによつて直に國家主義國に結ばんとするのである。かく自己の國情と國民性に立却せる自覺を有せざる我國の爲政者達は國際問題に於て國家主義的立場に模倣せんとするのみならず、現に國內問題に於ても國家主義的立場を模倣しつゝあるのである。

個人にしる國民にしる世に處する第一歩は「自らを知る」と云ふことである。然るに國民的自覺を有せざる現代日本の爲政者は今や日本を國際的重圍の中に陥れんとしつゝある。過去二千年の歴史發展を通して發展し來り將來幾千年に發展し行くべき日本の國民的生命を今や彼等の無智と無謀とによつて危からしめんとしつゝあるのである。國民たるものはこの國民的危機を默視すべきではないのである。

我々は先づこの樂觀を許さざる日本の現状を直視し、自己自身の現代を知ることによつてこの國民的危機に處する道を講じなければならぬのであるが、而もこれが爲めに最も大切なことは自己の國民性と國情に即する實踐的立場を自覺することである。かくてこゝに先づ現代日本の立却すべき國民主義的立場なるものを基本的に明にしなければならぬ。

現代の資本主義社會に對する實踐的立場は種々あるとは雖とも、これを原理的に區別すれば、既に述べしが如く資本主義と社會主義と國家主義と國民主義とに區別し得られる。今この各々の立場の相違を一言にして云へば、

資本主義は現代資本主義社會を原理的に保持せんとするものであるが、社會主義は市民社會の本質的構造に即してこれを變革せんとするものであり、國家主義は國家の本質的構造に即してこれを變革せんとするものであり、國民主義は國民の本質的構造に即してこれを變革せんとするものである。かくて國民主義の立場を基本的に明にせんには、先づ國民なるものゝ本質を根本的に明にしなければならぬ。これが爲めにはこれを一應學史的に考察し置くことを要する。

## 二 國民の本質に關する學史的考察

國民を國民ならしむる本質をその共同體的性格に於てはじめて明にしたものはアリストテレスである。即ち彼は人間を人間たらしむる本質を遺憾なく發展せしむることを以て人間善であるとなし<sup>1)</sup>、この人間善の實現の立場に立つて一切の人間的存在の本質を明にした。彼は先づ人と人との本質的關係を友の爲めに友の「善」を願ふところの「善の友誼」であるとなしかくて眞の愛の結びであるとして居る<sup>2)</sup>。彼は家族の本質をも國民の本質をもこの愛の結びとしての共同體的性格に於て考察してゐる。即ち家族の本質はその成員善の生活にあるとなし家長の妻子に對する支配は妻子の爲めに爲さるべきものであるとして居る<sup>3)</sup>。國民生活については「國家なるものは共同の場所を有し相互の罪惡の防止及び交換の爲めに建てられた單なる社會でない」と云ふことは明である。然しそれ等のものはそれなくしては國家が存立することが出来ない條件である。然しこれ等のものが總てよつても國家即ち社福ある諸家庭の集合であり團體であり完全なる自覺的な生活の爲めであるところの國家を構成しはしない。國

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第二篇第四章二參照

2) 同書、第一六一頁以下參照

3) 同書、第一八八頁以下參照

家の目的は善なる生活であつて、此等のものは善なる生活の爲めの手段である。而して國家は完全なる自足的な生活に於ける家族及び村落の結合であり、完全なる而して自足的なる生活とは幸福なる而して高尚なる生活を意味するのである<sup>4)</sup>と述べて居る。かくてまた「そこに於ける總ての人が、その何人たるに拘らず最善に行爲することが出來而して幸福に生活することが出来る支配の形式が最善なるものであることが明である」として居る。

かくの如くアリストテレスは國民生活に於ける人間の關係を愛の關係に於て把握したのであるが、この愛の關係は意志に基く國家的關係とも、理智に基く社會的關係とも異なり、情に基く共同體的關係と云はるべきもので、これが國民の最も本質的な規定である。故に以下この立場を徹底せしめて國民の本質を明にせんとするのである。

ヘーゲルは、アリストテレスを祖述したのであるが、國民生活を「國家」*der Staat* として把握することにより、國家權力的要素を偏重し、國民の本質を國家主義的に歪めた、これに反しマルクスは國民生活に於ける經濟社會的要素を偏重することにより、國民の本質を社會主義的に歪めたのである。而もヘーゲルに於て展開されたる國家的要素並にマルクスに於て展開されたる社會的要素は、アリストテレスに於ける國民共同體的立場に立つて、これを止揚する時、こゝに國民の共同體的本質は更に具體的に展開せしめられるのである。

かくて國民なるものゝ本質を明にせんとせば先づ共同體なるものゝ本質を明にすることが根本的に必要である。

### 三 共同體の本質

4) 同書、第二〇七頁參照

社會的歴史的實在に於て、人間は社會的歴史的なる作用聯關 *Wirkungszusammenhang* に於てある。この作用聯關の仕方なるものは、それに於て作用する *Wirken* 人間の本質に従つて原理的に三つに區別される。

人間なるものゝ本質は、實在に規定されながらもこの實在を規定する實踐的本質に於てある。即ち人間なるものはその情に於ける關心に基いて智に於て實在を認識し然る後情に於てこの實在認識 *Wirklichkeitskenntnis* について價值批判 *Wertschätzung* をなしこの情に於ける價值批判に基いて意志に於て目的を定立し *Zwecksetzung* この目的を實現すべき方策を附與する *Regelgebung*。この思惟の過程に於て明にされしところのものを、實行に移し以て實在を規定するのである。かくの如く人間の本質には智と情と意との別が見られるのであるがその根柢をなし中核をなすところのものは情であつて、智の働も、意の働もこれによつて基礎づけられて居るのである。

この人間の意志性に根ざして居るところの作用聯關の仕方は外的體制 *die äussere organisation* と云はるゝものであつてその代表的なものは國家 *Staat* である。このものに於ては權力的意志が原理となりそこに於てある人々はこの統一的意志 *ein einheitlicher Wille* によつて命令服從の關係に於て統一されて居る。人間の理智性に根ざして居る作用聯關の仕方は、文化體系 *Kulturssystem* と云はれるものであつて、社會と云はるゝものは即ちこれである。このものに於ては人間がその本質上求むるところの何等かの文化價值についての利益が原理となつて人々はこの價值についての生産交換の關係によつて結ばれて居る。これは單に經濟的價值を中心とする經濟社會についてのみならず、例へば學問社會なるものに於ても學問的價值の生産と交換の關係によつて相互に利益せんとする人々が結ばれて居るのである。それは文化價值を求める人々の理智よりする自發的な結びであつて、こゝには

外的意志的な強制はない。これ文化體系であつて外的體制でなき所以である。

かくて外的體制は人間の本質としての意志に、而して文化體系は理智に根ざして居るところの人々の聯關の仕方であるが、情に根ざして居るところの聯關の仕方が即ち共同體である。情が人間の本質に於ける最も深き根柢であり中核であるが如く、この情に根ざすところの共同體的な聯關の仕方が最も根本的な人間の聯關の仕方であつて、後に明にするが如く、他の聯關の仕方はこの聯關の仕方を根柢としてこの上に成立つものである。以上は他の聯關の仕方より區別せし共同體的聯關の仕方自體を以下明にしなければならぬ。

これを一言にして云へばそれ等の間に共同體的聯關が成立するところの人々は先づ自然的並に文化的な共通圈に於てある。この共通圈にある人々の各々に於ては共通感情なるものが成立するのである。この各人に於てある共通感情はそれが共同的の中心的な表現によつて現はされる時、こゝにこの中心的な表現によつて結ばれて共同感情に高められる。共同體なるものはこの共同感情に基礎付けられたところのものである。以下このことを先づ自然共同體なるものよりはじめて詳にしよう。

人々がその中に生れ出てこれに規定されると共にこれを規定するところの實在は先づ自然的實在である。人々は特定の自然に於て生れ出で、この特定の自然によつて規定されると共にこの特定の自然に働きかける。この自然への働きかけの主なるものは經濟的勞働であるが、その自然の特性に従つてこの働きかけも方も異なる。かくて特定の自然よりの規定とこの特定の自然への働きかけによつて人々の特定の性格が形成されて行くのである。

この自然なるものの人間性の規定について、ヘーゲルの自然心 *die natürliche Seele* の考へは、我々に教へると



ころ多いのである。<sup>1)</sup> 即ち彼は先づこの自然心一般について曰く「自然的諸規定は云はゞ心の觀念性の背後に自由なる實在を有して居る。それは意識にとつて自然諸對象であるが、然し心そのものはこの自然的諸對象に對して外的な對象として關係するのではない。心はむしろ此等自然的諸規定性をそれ自身に於て自然的諸性質 *natürlichen Qualitäten* として有して居る」、次にこの自然心の自然的諸性質を一般的なるものより次第に特種化して述べて居る。先づ最も一般的に人類について曰く「精神は第一にその基體即ち自然心に於て *in seiner Substanz, der natürlichen Seele* 普遍的なる地球的生活を自然と共に生活する。氣候の相違、季節の交替、時刻等を生活する」この自然生活は精神に於て部分的に唯だぼんやりとした氣分 *Stimmung* となつて現れるのである」次に人種について曰く「自然精神の普遍的地球生活は第二に地球の諸具體的相違に特殊化し、諸の特殊な自然精神に岐れるこの特殊な諸自然精神は全體に於て地理的な諸世界部分の性質を表現し人種の相違 *Rassenverschiedenheit* を形成する」。次に民族について曰く「自然精神の此差別は地方精神と呼ばれ得るところの諸特殊性へと進み行く。此諸特殊性は諸民族 *Völker* の外的な生活様式・仕事・身體的形成・性向に於て而も尙ほ一層諸民族の智性及び倫理的な性格の内的傾向及び能力に於て現れる。―諸民族の歴史が溯られる限りに於てその歴史は特殊諸國民の此型の固執的なもの *das Beharrliche dieses Typus der besonderen Nationen* を示め」つ居る」。こゝにヘーゲルがその歴史哲學に於て特に重んじて居る「國民の地理的基礎」*die geographische Grundlage der Nation* が考へられて居る。次に家族並に個人について考へて居る。曰く「心は第三に個別的な諸主體に個別化す、此主體性はこゝでは唯だ自然規定性の個別化としてのみ考察される。この主體性は諸家族の又は諸特殊個人の異なる氣質・才能・人相及び

1) Hegel; Encyclopädie, § 391. 以下。

他の諸傾向並に好惡の様態として存する。」

この自然心が人間の自然本能的な感情として人類に大小諸種の集團を生ぜしめる。ディルタイは次の如くに述べて居る、「最も深き形而上學的神祕に達しそこから性愛、子供への愛、郷土愛となり、自然強力的感情の強き、明な帶紐を以て我々を統べて居るところの社會的構成の自然的基礎、die Naturgrundlage der gesellschaftlichen Gliederung, welcher ... mit starken dunkelen Bänden naturgewaltiger Gefühle nus zusammenhält は、血族的構成並に定住の基本關係に於て大なり小なりの集團の同種類並にそれ等のもの間に於ける共通性を生ぜしめる。」<sup>1)</sup>而もかくの如き自然感情的な集團が共同體として、確立し歴史的に存續して行くところの構造が明にされなければならぬ。デュルケムの原始社會の研究はこの構造について教へるところが少なくない。彼は次く如くに述べて居る「一般に集合的感情は物質的に對象に定着してのみ自己の意識を克ち得るのである」「事實、個人意識はそれ自らは互に閑ち合つて居る。それはその内的狀態が譯出されるところの徴を手段にせずしては相交通し得ない。∴あらゆる特殊の感情が一つの共同感情へと融和し得る爲めには、従つてそれを表はす徴が自ら唯一の合力に溶解しなければならない。諸個人は合して居ることを彼等に知らせ且また彼等に自己の道德的統一を意識せしめたのは合成力の出現である。彼等が一致しまた一致して居ることを感ずるのは、同じ叫を發し同じ言葉を發し同じ對象に關し同じ所作を爲すことによつてある」このことは自然を共通にすることによつて各人に於て成立せる共通感情が同一の共同對象に表現されることによつてはじめて共同感情に高められるところの構造を極めて適切に明にして居る。従つてまたこの共同感情はこの共同對象を中心として持續し行くのである。

1) Dilthey; Einleitung. S. 43.

2) Durkheim; Les Formes élémentaires de la Vie religieuse. Le Système totémique en Australie. 邦譯デュルケム『宗教生活の原初形態』古野清人譯

かくの如き共同感情の同一的中心的對象の本質をデュルケムはトテムなるものの本質に於て明にしてゐる。即ち「トテムは、この非物質的な本體、このあらゆる種類の異質的存在を通して傳播して居るエネルギーが想像に再現されるところの物質的形態に過ぎない。これのみが禮拜の眞の對象である」「トテムイズムの根本にあるものは、要するにそれは恐怖や束縛のそれ以上に、悦ばしい信任の感情である」「原始人はその神を、自らあらゆる價を拂つてもその好意と妥協せねばならない外者・敵者・根本的にまた必然的に惡意ある存在とは見なかつた。全くそれとは反對に、神々は寧ろ彼等には親友・縁者・當然な保護者であつた：禮拜が向けられる威力を彼は、自己の上を非常に高く駆け廻つてその優越さを以て壓し來るものとしては表象しない。：恐らくは神性は歴史のこの瞬間に於ける程に人に近付いたことはなかつた」。

かくの如く共同體に於ける中核的な原理なるものは、この共同體に於ける人々の愛の感情の中心點であつて、それは外的體制又は國家に於ける權力的意志の如く人々に威壓的に臨み來るものでもなく、また文化體系又は社會に於て人々がそれによつて間接に結ばれるところの價值又は利益とも異なるところのものである。而してそれはトテムに限らないのであつて、共同村落に於ける氏神、一家族に於ける先祖の祭祀等は總てその根本に於て同一の本質を有するものと考へることが出来るであらう。また現實的には一家族の中心としての親はかゝる意義を有する。

要するにかくの如くに自然並に文化圈を共通にする人々の各々に於ける共通感情が共同の中心への關係に於て、共同愛に高められ、この共同愛に共同體が基礎付けられると云ふことは、共同體の本質であつて、この中心

とその共同體の各員とは互に生きた人格的愛の關係に於て即ち *Hingeben* の關係に於て結ばれてゐる。即ち各人はこの中心に對して愛の感情に於て歸向すると共にまたこの中心は各人に對し愛の感情に於て歸向し、かくて總ての成員はこの共同愛の中心によつて共同愛の中に融合し直接に人格的に統一されて居るのである。

このことは自然を共通にする人々の間に於ける自然共同體についても更に文化を共通にする人々の間に於ける文化共同體についても變りないのである。而し如何なる自然共同體であつてもそれが人間の共同體である以上そこには既にこの自然を共通にする人々の間の作用聯關によつて共通の文化圏が成立つて居るのであつて、人々は共通の自然圏と共にまた文化圏によつて規定されて居るのである。而も歴史の進むにつれこの共通の文化圏が愈々豐なる發展を果げ行くが故に文化の共通圏によつて規定されることは愈々大となるのであつて、而もこれと共にその根底に於ける自然の共通圏によつても規定されて居るのである。

かく共同體に於ては、人々は共通の自然と共にまた文化によつて規定されて居るのであつて、かくて成立せる共通感情が共同感情に高められ、この共同感情に共同體が基礎づけられて居るのであるが、而も主として自然に基礎づけられた自然共同體と主として文化に基礎づけられたる文化共同體とはまたその性質を異にする。即ち自然共同體に於ては「社會的構成の自然的基礎が自然強力的感情の強き不明な紐帶を以て人々を結んでゐる」のであつて、人々は自然心に於て自然的本能的に結ばれて居るにすぎないのであるが、文化共同體に於ては人々の自然心は文化を通して人間の本質的自覺に高められ相互の關係は人間愛に進められるのである。従つてまた對外關係に於ても自然本能的な共同體はその根底たる自然なるものが特殊的排他的なると同様に他に對し排他的である

が、文化なるものは互に他を待つて自己を具體化し完成するところの *Bedeutungszusammenhang* 意義聯關をその本質とするところのものなると同様にこの文化に立脚せる文化共同體なるものは互に意義聯關の關係に立つのである。かくて人間的存在はその本質上自然共同體より文化共同體に高められなければならないのである。而もこれが爲めには自然共同體が本質上先づ國民共同體に高められ、更にこの國民共同體が本質的發展を果げなければならないこと次に述べるが如くである。

以上に於て共同體の本質を明にしたのであるが、國民なるものゝ本質は國民共同體としてあくまでこの共同體的本質を土臺として明にされなければならない。即ち國民が成立すると云ふことは、自然共同體の擴大によつて成さるのであり、國民の發展と云ふことはその共同體的地盤に於て諸種の制度文化が發展し行くことであり、國民の完成と云ふことは共同體が具體的な共同體として自己を完成することである。

先づ國民共同體の成立と云ふことについて考へて見よう。

#### 四 國民共同體の成立

以上明にせし如く共同體の本質は、共同愛に結ばれたる人間の有方にある、故に共同體に於ける諸種の生活の特徴は、この共同的生命の表現たる點に存するのである。自然共同體に於ける經濟生活が、今日の市民社會のそれに於けると全く異なつて、共同經濟なることもまたこのことによるのである。即ち市民社會に於ける個人主義的生命の經濟的表現が個別的個人主義經濟であることが當然であると同様に、共同體に於ける共同的生命の經濟的

表現が共同經濟なることは當然である。エンゲルスは『家族・私有產財及び國家の起源』に於てこの自然共同體の共同經濟を特に強調して居る。この村落共同體に於ける共同經濟なるものは各國の原始共同體に於て見られるところであつて、我國に於ても大化改新以前に於て見られた。加之この自然共同體の共同的精神が支配的である限り、この共同經濟もまた持續するのであつて、琉球に於ては、實に明治三十六年に至るまでかくの如き村落共同體とその共同經濟が存續して居たのである。而してその久高島に於ては今日も尙ほ班田收授の方が行はれて居るのである。<sup>1)</sup>

復古主義者は屢々かくの如き自然共同體を以て人間的存在の理想とするのであるが、この段階に止まる限り人間は野蠻未開な狀態を脱し得ないのである。故に人間がその本質上人間として發展完成を意圖するものである限りこの自然共同體なるものは眞に人間的な共同體に高められざるを得ないのである。これが即ち「國民」なるものであることは、アリストテレスが適切に述べて居る如くである。彼はその『政治學』のはじめに於て、人間が先づ家族として存在し、次に數家族が結ばれて村落を形成し、更に「數家族が自足に足る大さの單一な完全な共同體に結ばる時、國家が存立するに至るのであつて、それは生活の單なる必要の爲めに成立つが善なる生活の爲めに存續するものである、而してそれ故に社會の初めの諸形態が自然本質的なものであるならば、國家も自然本質的なものである、何となれば國家はそれ等のものの目的であり、事物の本質はその目的であるから」と述べて居る。<sup>2)</sup>即ち自然共同體はその本質的な目的として國民共同體にまで發展すべきものである。

かくて各國民社會の古代に於てはそこに多くの自然共同體が並存して居たのであつて、この自然本態的な排他

- 1) 拙稿『琉球農村共同體と我國民理想としての國民共同體』本誌第三十六卷第一號參照
- 2) 今日の日本に於てはこの立場の代表的なものは樫藤成郷である、その著、「自治民範」「農村自救論」等參照。
- 3) Aristotle, *Politica*, 1252b

的なる自然共同體が相爭ふことによつてこの共同體の單位が次第に擴大された。これと共に共同體の中心勢力は強化され行くのである。かくて遂に一つの統一體にまで發展したのである。これを我國の歴史に見れば大化の改新に於てはじめてこのことが完成したのである。即ち大化の改新に至るまでは土地人民は氏族村落をなせし氏族團體に歸屬し天皇權はこの氏族團體の長にまで及んで居たに過ぎないのであるが大化の改新と共に人民並に土地は王土王民となり天皇權はこれ等の上に直接に及ぶに至つたのである。この大化の改新に於ては國家を家にしたとへ、天皇を國家の家長になぞらへ、政治的敎化の精神の下に統治が行はれると云ふ思想が存在して居た。<sup>1)</sup>經濟についても古くよりの村落共同體經濟が全國民的に行はれたのであつて、班田收授の法は即ちこれである。かくて大化の改新なるものは、古くより擴大し來れる共同體的構成が國民單位にまで擴大されたものとして考へることが出来るのである。

かくの如く自然共同體が國民共同體へ高められるが爲めには先づこの自然共同體がそれに於て人間善の實現が可能なる大いさにまで發展しなければならぬのであるが、原始共同體がかく擴大し行くことによつてそれに於て未分前の統一に於てあつたところの人間生活に必要な各種の機能も分化發展して善なる人間の生活に役立ち得るものとなり行くのである。

ディルタイは原始家族なるものについて次の如くに述べて居る。「家族は、凡ての人間秩序・凡ての團體生活―犧牲團體・經濟的統一・防禦團體等―の多產的な母胎である。家族は愛並に孝順の自然強力的な結びの基礎に於て、其持續的な機能であるところのものを法律・國家・宗教的團結等との未だ尙ほ分化せざる統一に於て合成しつゝ、

1) 牧健二著、日本法制史概論、第五七頁參照

含んで居る。」即ち原始家族なるものは含蓄的總體的な人間社會であつてその後分化發展すべき諸種の社會關係の一切を未分前の統一に於て含んで居るのである。

かくてこの原始家族が擴大し行くにつれ此等諸多の機能は分化發展し行くのであつて、ヘーゲルはこの「家族の擴張」Die Erweiterung der Familie を次の如くに述べて居る。「家族の他の原理への移行としての家族の擴張は現實に於ては、一方は一民族即ちそれ故に共通の自然的根源を有する一國民 zu einem Volke, — einer Nation, die somit einen gemeinschaftlichen natürlichen Ursprung hat — の家族の靜な擴張であり、他方は分離せる諸家族團體の集合であつて、それは支配的な權力 herrliche Gewalt によるか、又は結ばれたる欲求及び其充足の相互作用から生ずる自由意志的な結合による。」<sup>1)</sup>かくて民族なる自然共同體の上に國家並に社會が成立つこととなるのである。即ち自然共同體が國民的單位にまで擴大されると共にその自然本能的な統一力が弱り來るが故に國家權力により秩序が保たれることを要しこの秩序の下に於て人々の欲求を充足すべき諸種の社會が成立つこととなる。國民の成立につきデイルタイは「國民の自然的構成」について述べたる後「此血縁的構造に歴史的行爲並に歴史的運命が組合されて諸國民即ち一時代の社會的聯關に於ける文化の相對的に獨立なる諸中心である所の又歴史的運動の擔當者であるところの國民が成立する…國民の總ての生命表現例へば法律・言語等の同種性に於て相互に示めされて居る所の一國民に於ける個性的な生命統一體 die individuelle Lebensinheit なるものは神秘的に國民心・國民精神・有機體と云ふが如き概念によつて云ひ表はされる。而もこれ等の概念は歴史にとつて役立たない。…國民と云ふ表現が何を意味するかは…只だ分析的にのみ解明され得るのである。」として居る。これ彼が

1) Hegel: Rechtsphilosophie. § 181.



„Aufbau“に於て、諸種の文化體系がそこに於て國家より外的體制に統一されて居るものとして die politische Organisierte Nation と呼べるものである。而もこゝに特に高調すべきことはこの「個性的なる生命統一體」としての國民が根本的に共同體的性格を有することである。次にこの國民共同體の發展につき考察する。

## 五 國民共同體の發展

かくの如く國民なるものはそれ自身共同體的な存在であつて國家、社會なるものも本來この國民共同體に於て分化發展し來るところのものであるが、この國家並に諸種の社會の發展によつて自然的なる國民共同體が文化的自覺的な國民共同體に高められ、かくて自らを完成し行くものなることである。故に國民の發展なるものは、その本質上共同體の一貫せる發展でありこの共同體の地盤に於て國家並に社會の諸形態が成立消滅するのである。

人間の生命なるものは何等かの制度の下に於てありこの制度との辯證法的關係に於て發展し行くところのものであるが、國民においても同様である。故に國民の發展の構造を明にせんに、先づ國民的生命なるものより考察する。

國民なるものは、人間の本源的な有方としての共同體の擴大せるものなるが故に、國民的生命は本質上共同體的なものである。このことは外部よりの侵略其他の擾亂によつてその本源の構造が破壊されざりし國民について特に顯著に見られる。その例を世界史に現存する國民について求むれば、我國民の如きはその代表的なものであ

る。即ちそれは島國としての統一的な構造を有する國民的自然の上に形成されたる大和民族の共同體として皇室を家長とし一貫せる發展を果げ強き共同感情に結ばれて居るのである。而も何れの國民に於てもそれが一國民を形成して居る以上、何等かの程度に於てその根底に共同體的な構造を有して居る。例へば最も集合的に形成された國民としての米國民と雖もそれが國民を形成して居る以上、米國民としての共同感情に於て統一されて居る一面を有するのであつて、この國民的共同感情の表現が米國民の國民的行動となつて現れるのである。米國民の世界大戰への參加と勇敢なる行動はその顯著な場合である。而して何れの國民と雖もこの共同感情を失ふならば既に一國民としての存立の根據を失ふのである。

かく共同體的に構成されてゐるこの國民的生命なるものはその根底に於て先づ家族共同體により構成されて居るのであるが更に特定の形態の國家と諸種の文化社會によりて構造され國民文化を創造し發展する。而もこの制度なるものは國民的生命がこれを表現しこれを以て自己を構成したところのものである。かくて或形態の國家並に社會の制度の下に於て國民文化を形成し發展しつゝあつた生命が最早やこの制度の下に於てはその發展を續け得ざるに至れば、これを否定して新なる制度を表現しこれを以て自己を新に構成しこの制度の下に於てその發展を新に繼續するのである。かくの如き國民的生命と制度との辯證法的發展を通じて諸種の國民文化が形成せられこの國民文化の地盤に於て國民的生命は次第に人間的自覺的に高められて行くのである。今このことを類型的に考察すれば次の如くである。

即ち國民的生命を構造せる制度はその根本に於て共同體であり更に社會並に國家であるが、その何れか支配的

なるかによつて國民的制度の諸種の型が見られる。即ち共同體的要素の支配的なもの、國家的要素の支配的なもの、社會的要素の支配的なもの、が即ちこれである。今この國民的制度の諸類型を、國民的發展の順序に於て見んに、一國民的發展の最初に於て見らるべきところのものは、自然共同體的要素の支配的なものである。古代の民族的な國民制度はこれであつて國家も民族的な國家であり、社會も民族的な共同村落であり、民族的家族的要素が全體を支配して居る。次に國家又は外的體制的要素の支配的なものに於ては國家は絕對權力的國家であり社會に於ても權力的支配が多く加はり、家族も家長權力的なものとなる。かゝるものを我々は中世に於て見ることが出来る。次に社會的又は文化體系的要素の支配的なものに於ては、物的な文化體系としての個人主義的經濟社會が特に支配的となるが故にその國家意志は利己主義的投票の多數決によつて決定される政黨的國家意志であり、諸種の精神的文化體系は經濟社會によつて支配され、家族の共同體の本質もその個人主義原理によつて個人主義化されて行く。ヘーゲルが *der äussere Staat* と云へる市民社會 *die bürgerliche Gesellschaft* はこれである。これ即ち現段階の國民的制度である。最後に自覺的な共同體の支配せるものは、自覺的な國民共同體であつて、そこに於ては共同體の本質が十分に實現せられるのであつて、國家、社會、家族の各々が國民的生命の發展完成の爲めのその固有の機能を遺憾なく發展して内面的に統一され成員の總てが人間としての本質を十分に發揮しつゝある状態である。これ即ち將來さるべきところの具體的な國民共同體である。

今これ等諸種の國民的制度の下に於てある國民的生命によつて實現さるべき文化の相違について見んに、第一の段階にあつては、人々は尙ほ民族的共同體的感情に支配されて居るのであつて、そこに於ては情緒的な文化と

しての宗教並に藝術が共同體的なる關心の對象として作り出される。我國の古代に於て誇るべき宗教的藝術も亦かゝる性質を有して居る。第二の段階にあつては、權力的支配が強化されて、人々はこの權力的支配の命令服従に於て意志的に訓練されることとなり、諸種の意志的文化が發達する。我國の中世に於て成立發達せし武士道、儒教文化、禪宗等は即ちこれである。經濟については中世の封建制度なるものは農業に立却せるものなるが故に農業的生産力の進歩に貢獻するのである。第三段階に於ては人々は中世の封建束縛より解放されて自己の理性に訴へて自律的に行動せしめられることとする。かくて總ての文化域はそれ自身の原理による自由なる發展に任せられ目ざましき發達をなすに至つたのである。經濟的文化體に於ても經濟的自由は富の生産を刺激し巨大なる生産的諸設備を生産せしめ生産力の飛躍的進歩を果せしめたのである。而も物的文化域の自由放任は必然に貧富の階級的分裂を伴ひ、この階級的分裂が富の生産分配の束縛となり來るのみならず、他の文化域の發達をも障害するに至るのである。かくてこの段階は人間の個人的自由、合理主義的經濟並に政治形態、科學等諸種の偉大なる合理主義的文化を齎らすのであるが而も國民的生命の發展を阻害するに至るのである。

かくて國民的生命の發展完成の爲めには、この段階の國民制度をこれまでの諸段階の齎らせしところのものを土臺とすることによつて變革し、以て最も具體的な國民制度を實現しなければならないのである。かくて次に國民共同體の變革の構造を以上明にせし國民共同體の本質的構成に即して考察しなければならない。こゝにこの新國民主義の實踐の構造が明にされることとなるのである。

1) 拙稿、『經濟の本質』參照